

こらっせ便り

2017年4月7日



【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008

Eメール : info@korasse-kanagawa.org

「神奈川リフレッシュプログラム」の準備スタート

「福島子ども・こらっせ神奈川」事務局長 遠野 はるひ



美しく、力作ぞろいの作品

今年も8月7日(月)から9日(水)まで山北町・横浜市を会場に、「神奈川リフレッシュプログラム」を行います。みなさま、今年もご支援をよろしくお願いいたします。

2月には、「こらっせユース」と事務局で実行委員会が結成され、プログラムに向けた準備がスタートしました。実行委員会では「こらっせユース」を対象に、4月に放射線と保養をテーマにしたフクシマ勉強会、6月にはキャンプや子どもについての研修会を計画しています。また、5月14日(日)には、今年3月まで楡葉中で教鞭をとられていた日野彰さんを講師にお迎えし、「神奈川リフレッシュプログラム」のキック

オフミーティングを開催します。ぜひ、ご参加ください。

3月5日、太鼓と「よさこい」のコンサート、楡葉グッズを製作して下さっている和布細工教室「ほのぼの」と楡葉町老人会の作品展が開催されるとのお知らせをいただいたので、事務局スタッフ3人で楡葉に行ってきました。

ご存知のように今年の4月から楡葉町の新校舎で、楡葉小・楡葉中の授業が再開されます。楡葉町役場を見下ろす丘の上には新校舎が建設されていました。1階に小学校、2階に中学校がはいる、子どもたちは自宅から学校までスクールバスで通学するそうです。また、役場近くには診療所、復興住宅、こども園(保育園)からなる真新しい「コンパクトシティ」が開発されていました。学童はこども園の一角で運営されると聞きました。

当日のコンサートには500人もの参加者があり、楡葉のみなさんの故郷を思う熱気に圧倒されました。音楽で被災地の復興をと結成された「ビートルズのチカラ!」の楡葉町バンド・「Love & Peace」のみなさまとも交流しました。メンバーの方々が音楽活動に加え、楡葉町「よさこい」のリーダーでもあると知り、その多才さにビックリ。「(6年が経過して) 私たちにはこれからがスタートです」との言葉が心に残りました。

こらっせユース

春休みに2度学童支援に行きました

3月23日から24日と3月29日から30日の2度、「こらっせユース」（大学生）が、楡葉町の避難者が生活する仮設住宅の一角にある「空の家」（いわき市）で行われている学童保育の支援に行きました。4月からは小中学校も楡葉町に戻ります。このため「空の家」での通常の学童は3月末まで。これからは夏休みなど長期休暇のみの開設となります。子どもたちと思い切って遊んできました。参加したメンバーの感想です。

3月23、24日 青山学院大学

牛乳パック万華鏡と紙飛行機大会

子どもたちの無邪気さを思い出す

内貴 杏奈

今回の空の家訪問は、私にとって初めての福島の子もたちと、現地福島で関わるという機会でした。

1日目は、空の家において、企画していた工作を中心とした活動を行いました。子どもたちと関わるのが夏休み以来で少し緊張していましたが、子どもたちが元気にはしゃいでいる様子を見て、無邪気さを思い出しリラックスすることができました。工作は、企画通りの進行ができました。ちょっと難しいかなと思っていた



「牛乳パック万華鏡」も、子どもたちは上手に組み立てて作っていたので安心しました。高学年が卒業式だったこともあり、当初の予定の半分の人数でしたが、元気いっぱいな子たちばかりだったので、楽しく過ごすことができました。

2日目は体育館において、主に自由に遊び、時々企画したレクを全員で行いました。工作の材料で行った「紙飛行機大会」は、どうしたら遠くに飛ばせるかと子どもたちも私たちも夢中になり、予想以上に盛り上がったので良かったです。高学年の子がいたこともあり、1日目と比べて全体的に落ち着きがあるように感じました。

中学生以降の上下関係のある環境に慣れていたせいも、学年に関係なくみんなで遊ぶ小学生がとても新鮮に感じられました。次の訪問の際に、少し大きくなった子どもたちに会うのが楽しみです。

6年後の現実を再確認 梅澤 貴之

昨年の8月に続き2度目の学童保育プログラムに参加させていただきました。前回行った時に遊んだ子たちが自分のことを覚えていてくれて、すぐに飛んできてくれたことが本当にうれしかったです。また前はあまり遊べなかった子と今回は一緒に遊んだりできたことはよかったです。



子どもたちは相変わらず元気いっぱい、自由な言動に振り回されることもあり、学童の先生や教員の大変さを改めて痛感させられました。しかし、やはり子どもは良くも悪くも非常に素直で正直でした。なんでも口に出したり、感情を行動であらわしたり、時にそれが悪い方向に転んでしまうこともありました。その素直さ、正直さを忘れずに大きくなって欲しいと思いましたし、自分たちが忘れてしまいがちなその感情の重要さも実感し、可愛らしい部分も見せてくれた彼らからの学びがありました。

また、いまだに空の家の周りがある木造の仮設住宅にはたくさんの家族が住んでいる現状を改めて目の当たりにして、東日本大震災から6年経った現在でも苦労している人、頑張っている人がまだまだたくさんいるということを忘れずにいなければならないことを再確認しました。気象情報の最後には各地の放射線量の発表もしており、自分たちの普段の生活では気付かないことが多くあるという現実も、きちんと受け止めなければいけないと思いました。自分たちが直接何かするという事は難しいかもしれませんが、そういった現状を知っておくこと、気にしておくことが少なくとも今すぐにできる大事なことではないかと感じました。

子どものパワー炸裂 福嶋 晶

1日目は、人数は少なかったものの、一人ひとりのパワーが大きくて、そのパワーに圧倒させられました。子どもたちがそれぞれやりたい遊びをやって交流を深めました。その後私たちが企画した「牛乳パック万華鏡」と、「ペットボトルけん玉」を作りました。万華鏡は少々難しかったですが、学生がサポートしながら一人ひとりの万華鏡を完成させることができました。「ペットボトルけん玉」は、比較的簡単な工作ですがペットボトルの大きさやビニールテープの色を選ばせて、オリジナルのけん玉を作ってもらえることができました。どちらの工作ももう一回作りたいと言ってくれた子がいて、友達の分も作ってあげていて、心が暖かくなりました。

2日目は、朝子ども達と一緒にバスに乗って体育館へ向かいました。体育館はとても寒かったですが、子ども達はそれにも負けずに身体をめいっぱい動かしていました。最初は昨日と同じく自由に遊びました。その後、私達の企画した遊びをやりました。昨日残った画用紙で「紙飛行機大会」を行いました。作り方を指定しなかったため、折り方を子どもたち同士で教えあっている姿が見られたの

が良かったです。紙飛行機大会の後、体育館にあるもので障害物競走をやりました。一生懸命自分のチームを応援している姿が印象的でした。

初めての学童保育でしたが、子どもたちからたくさん元気をもらいました。春休みのひとつの思い出になってくれていたらいいなと思います。

子どもの想像力の豊かさに感動 薬科 早百合

今回で 2 回目の訪問となったのですが、前回空の家に訪問した時に私の顔を覚えてくれていた子たちが何人かいてとても嬉しかったです。

私たちは 1 日目に身近なものから遊びを考えるというテーマで、牛乳パックやペットボトルを使用して万華鏡やけん玉を作成するという企画を持ち寄りました。子どもたちはみな興味津々で「次はどうするの?」と積極的に質問をしてきてくれました。余った材料を使用し自分の考えた新たなけん玉を創作していた子もいて、子どもの想像力の豊かさに驚かされました。この日は卒業式ということで低学年の子しか参加できず少人数でしたがどの子も企画を楽しんでくれた様で良かったです。

2 日目は体育館へ行き自由に遊んだり、小さなレクリエーションをしたりして楽しみました。レクリエーションは紙飛行機大会、障害物競争を行いました。紙飛行機大会は我を忘れて大学生の私たちも一緒になって楽しみました。高学年の子どももいたため、1 日目よりも大人数で様々な遊びをして楽しんでくれていたようなので安心しました。

空の家に来ていた何人かの子どもたちは、これから榎葉に引っ越しをするようで、訪問した当時は引っ越しの作業をしていると本人たちから聞きました。少しずつ復興しているようにも感じましたが、空の家の周辺を見るとまだ仮設住宅が目立つな、という印象を受けました。最近はニュースでの報道も少なくなり、世間の関心が震災当時と比較すると薄れてきてしまっているように思います。そのような中でも私たちはこのことを忘れずに少しでも力になれるよう日々過ごしていきたいと今回の訪問でさらに感じました。

3 月 29、30 日 横浜国立大学

楽 し く 遊 べ る 場 づ く り

安心して笑顔になれる場 梅津 彩

去年の 3 月に空の家で子供達と遊んでから 1 年経ち、今年も空の家で子供達と遊ぶ機会をいただいたこと、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。今回一番驚いたことは、子供の人数が減っており、2 日目は 4 人という少なさでした。学童を利用していた半数以上の子供達が榎葉町に引っ越したり、引っ越しの準備を進めているそうです。今後、榎葉町にある児童館をメインにし、空の家は長期休暇のみ開くそうです。空の家でも児童館に持っていくおもちゃをまとめていたり、先生方も引っ越しの準備をしていました。子供達からは、みんなに会えなくなるのさみしいなあ、今日で空の家最後なんだよねえというつぶやきを何度か聞きました。

小学生の子供達にとって震災が起きた時は幼く、かすかな記憶だったと思います。仮設住宅での暮らしが当たり前な子供達も多くいました。外で安心して遊べる環境や、子供達が我慢することなく騒いだり楽しめる場所があり続けることは本当に大切だと思います。これから更に環境が変化していくため、親子共に大変なことが多くなると思います。テレビで復興の話題は減ってきています。私たちは震災を忘れてはいけず、今後も少しでも多くの方が安心して笑顔になれる場作りが大切だと思います。私たちの活動が少しでも力になれば幸いです。



子どもの会話から学ぶ 松田 優希

空の家に着いて一番驚いたことは、児童の人数が大幅に減っていたことです。ちょうど一年前も学童に行かせていただいたのですが、その時の3~4分の1程度の人数でした。でも児童の好きな遊びは変わらず、「だるまさんが転んだ」、「かくれんぼ」を何度繰り返しても終始笑顔でした。そんな姿を見て私自身も嬉しく思うと共に、人数が減った今、思いっきり追いかける・逃げるなどのエネルギーギッシュな遊び、友達と一緒に遊ぶ遊びをすることが、以前より厳しいのだと分かり、学童支援の必要性を改めて感じました。

「僕が3才のときに、何が来たと思う？周りの友達には信じてくれないんだけど…！」と、昼食の時となりで食べていた男の子が私に聞きました。突然の質問だったため、何かサプライズの話でもしているのだと思いましたが、「ヒントは14:46だよ」という二つ目の言葉に、地震のことを言っているのだと分かりました。「答えは東日本大震災」そこで話は次の話題に変わりましたが、“ふと、その話題が出てきたこと”“そのことをよく聞いている児童とそうでない児童がいること”…。その場面から色々なことが考えられます。私が考えるより実際はもっともっと深く、全てを理解することは出来ませんが、どこに住んでいる子供にも、思いっきり笑える場所、落ち着ける場所があってほしい、そのために私も活動を続けていきたいと思った2日間でした。

来年も是非参加したい 高田 隼矢

今回初めて学童保育に参加してみてまず思ったことは、空の家に来ている子供たちは未だに仮設住宅で生活を送っていて、普段は騒いだりできないことにもものすごく驚きました。また幼い頃に起きた震災の影響を受け続けて生活していると思うと、少しでも楽しんでもらえる場を提供することが大事だなと思った。そう言った意味で空の家というのは子供たちにとってかけがえのない場所であるのではないかと。実際に子供たちと2日間過ごしてみて、子供たちはすごく元気で大学生よりも遥かに体力もあると感じた。

私も初めてだったので初めはドキドキしていたが、子供たちの方から話しかけてくれたり遊びに誘ってくれたりしたおかげで、私自身もすごく充実した楽しい時間を過ごすことができた。グリッタ

ーペインティングも子供たちが興味を持ってやってくれたのでよかった。今回は想像していたよりかなり子供の数が少なかったが、その分一人一人とたくさんふれあうことができたので、それもまたよかったと思う。来年も是非参加したいなと強く思った2日間だった。ありがとうございました。

ちょっと生意気で可愛い子どもたち 杉野 迅

2日間の学童保育。最初にいわき駅に着いた時、震災地とは思えないくらい綺麗な街並みだった。しかし、空の家に近づくにつれてたくさんの仮設住宅が見えた。悲しいとも、辛いとも言えないようななんとも言葉にしがたい思いで胸が痛かった。ここに住むのが当たり前のような生活。どんな子どもたちなんだろう。けれど、会ったらなんてことはない、ただのやんちゃで元気がありすぎるくらいちょっと生意気で可愛い子どもたちばかり。すぐに打ち解けて、手を引っ張ったり、足に絡みついたりしてきた。また、自分たちが企画したグリッターペインティングもキラキラしながら絵を描いていた。出来上がった作品をある子どもからもらったのだが、すごく嬉しかった。こんな陳腐な言葉でしか表せないのが悔しいくらい嬉しかった。

被災地の子ども。きっともう震災のことをしっかりと覚えている子どもはいなくなっていくだろう。しかし、そうであったとしても変わらず私は福島の子どもたちに笑顔届けたい。横浜ではありえない、されど子どもたちにとっては普通の生活。だからこそ、当たり前じゃない生活を届けるために私は彼らにまた会って笑顔届けたい。もちろん、自分も笑顔になってしまうのだから行きたくてしょうがないのだが。今年の夏、こらっせの全参加は難しいかもしれない。けれど、1日でも2日でも必ず参加して、子どもたちに今自分が伝えられること、届けられること、できることをしっかりとやりたい。

笑顔の絶えない「空の家」 鈴木 香瑠

私は中学2年生の頃、宮城県の気仙沼市に訪れたことがあります。その頃はまだ震災から3ヶ月足らずで、海に近い地域は地震や津波の被害が残った変わり果てた姿のままでした。それから6年、今回初めて「空の家」を訪れました。

「空の家」の周辺にはまだたくさんの仮設住宅があり、子どもたちは仮設住宅で暮らすことが当たり前になっていることに驚き、悲しくなりました。自宅の前

で思い切り遊べない分、子どもたちは「空の家」でとても元気に過ごしており、私たちが訪れるととても喜んでくれ嬉しかったです。

子どもたちは元気に室内をかけまわり、かくれんぼやダンスをしていました。私たちが企画したグリッターペインティングも、自身の手をキラキラさせながら笑顔で取り組んでいました。「空の家」は、今後は小学校の長期休暇のみ開放するそうですが、笑顔の絶えない、温かい場所のままであってほしいと感じました。来年度もぜひ訪問したいと思います。

